静かなドーム

解 答

ストップ。

このファイルには答えが書かれています。
判定シートをまだ記入していない方は
お戻りください。

犯人は誰か

エイドリアン・ヴォスを殺害した人物

イングリッド・ソレンセン

証拠の連鎖

1. これは転落ではない。 鑑定書は転落説を三方向から崩している。致命傷は一撃のみで、その痕は細く湾曲した金属の縁と一致すること。体表に第二の衝突痕がまったくないこと。そして防御創がないのは、打撃が背後から来たからであること。カウンターウェイト・アームの拭き取り部から採った検体は、血液の予備検査で陽性を示した。凶器はプラットフォーム上のあのアームであり、使った者がそれを拭き取ったのである。

2. 死亡時刻を語ったのは空だった。 露出画像の星の軌跡は00:32から00:51にかけて乱れている——追尾モーターが操作盤で手動に切り替えられ、また自動に戻された、まさにその区間である（付録1）。鑑定書が示す死亡推定は00:30〜01:10。犯人はプラットフォームで作業するために追尾を止めなければならなかった。カウンターウェイト・アームは解放されて初めて凶器として使えるのであり、それは手動モードでしか行えない。犯行の数分間は、空の撮影画像に「中断」として刻み込まれていた。

3. 操作盤と扉が指すのはただ一人。 操作盤の操作はドーム内の実機で、個人コードにより、しかも一度で正しく入力されて行われた——コード3である。付与表によれば、コード3はイングリッド・ソレンセンのものだ。カード記録も同じ話をしている。カード05（ソレンセン）は00:21に本館を出て、00:24にドームへ入り、00:58にドームを離れている。リベラが00:26に聞いた扉は、この二つ目の通過と符合する。ソレンセンは供述でこう言った——「23時ごろ自室に上がり、朝まで出ていません」。彼女自身のカードと彼女自身のコードが、それを否定している。

4. 手袋。 手すりの擦過痕から出た濃灰色の羊毛繊維は、その夜に洗濯室で洗われた手袋と一致する。そしてその手袋の袖口には、洗濯後にもかかわらずカウンターウェイト・アームの整備グリスが残っていた。その仕事によってそのグリスを袖口に付けうる人物は、12月28日にアームの整備に署名した技師ただ一人である。

動機

ヴォスの机上の書きかけの文書（付録2）は、翌朝二件の報告を行うと告げていた。第一はミロのデータ売却——ミロ自身がそれを知っており、後に自白している。第二は整備予定表に事後に書き足された署名だった。ソレンセンは追加供述でこれを「書類仕事の遅れ」として小さく見せようとした。だが昨冬の換気設備の故障は人を一人入院させており、日付をさかのぼって書き足された整備記録は、過失を隠すために作成された文書偽造である。製造欠陥の報告書はファンを救う。偽造は救わない。十九年の職歴、年金、そしておそらくは刑事手続——そのすべてが午前9時の衛星通信枠を向いていた。

ソレンセンは、その夜ヴォスがドームにいることを知っていた。露出撮影の夜、彼はプラットフォームに上がり、微調整の手帳を手で書いていた——外側の手袋を外していたのはそのためだ。00:21に通路へ入り、操作盤で追尾を止め、解放されたカウンターウェイト・アームを用い、それを拭き取り、転落に見せるため遺体を階段の下へ移し、モーターを自動へ戻して00:58に立ち去った。手袋は洗濯室で洗った。朝、遺体を「発見する」役を務めることまでが計画のうちだった——第一発見者が犯人であるはずがない、と人は思い込むからである。

他の三人はなぜ無実か

この資料では4人全員が何かを隠していた。そのうち3人にとって、それは殺人ではなかった。

レナ・ハルトマン — 「データ盗用の一件と、あの冷たい台詞」

死者とは公然と対立しており、「とうとう起きたのね」と言えるだけの冷たさもあった。しかし衛星通信の記録は、死亡推定時間帯のまさに中心において彼女を管制室に縛りつけている——セッションL.HART-0231、23:31から00:47まで、七十六分間の連続通信。操作盤が手動に切り替わった00:32、彼女は通話の最中だった。カード02はその夜の記録のどこにも現れない。追加供述の論理も筋が通る。その夜のうちに自らの申立てを公的な記録に残した人間が、その相手の死によって得るものは何もない。手続は、ヴォスが生きている間だけ彼女の役に立ちえたのである。

ミロ・ベルク — 「データ売却、学位の危機、そして証人なし」

書面の上では最も強い動機を持つ。ヴォスは翌朝、彼を研究所に報告するつもりであり、本人もそれを知っていた。アリバイもない。しかし物理的な手段がなかった。彼には操作盤コードが付与されておらず、操作は正しいコードで一度で実行されている——推測されたのではない。彼のカード03は、その夜どの扉でも読み取られていない。手すりの繊維は灰色の羊毛であり、彼の手袋はオレンジ色だ。彼が隠していたのは本物の違反行為であり、それは自白した。だが彼が売ったのはデータであって、人の命ではない。

トマス・リベラ — 「悪い知らせの使者と、深夜の徘徊」

死亡推定時間帯に起きており、最初の供述ではそれを省いていた。しかし給水機のカウンター（00:07）と薬品棚のセンサー（00:09）が、彼を本人の言うとおりの場所——食堂——に置いている。来訪者カードにはドーム側通路の権限がなく、どの扉でも読み取られていない。操作盤コードも持たない。手袋は茶色の革である。予算削減はそもそも1月8日に確定していた——ヴォスの死は彼に何ももたらさない。そして彼が00:26に聞いた扉は、この資料で最も価値ある証言となった。犯人がドームへ入った分を確定させたのである。

事件解決

イングリッド・ソレンセンはエイドリアン・ヴォス殺害の容疑で逮捕された。カウンターウェイト・アームから採取された血液のDNAは死者のものと一致した。換気設備事故の調査は再開され、整備予定表の筆跡鑑定は偽造を裏づけた。

解けましたか。 murdermysterytime.com には未解決の事件ファイルがまだ数十件——ブラウザでそのまま遊べて、最初の事件は無料です。